

*The Wings of the Dove*における富の力 —ジェームズの新しい世界観—

後川知美*

The Power of Wealth in *The Wings of the Dove* —James's New Perspective—

Tomomi USHIROKAWA

Abstract : As pointed out by a number of scholars, Henry James frequently uses monetary images to describe his characters and their relationships to society throughout his fictional works. In *The Wings of the Dove*, Milly Theale, one of James's major phase protagonists, tends to be treated according to her financial background and tragic situation by her worshippers and those who envy her wealth. However, Milly's great fortune does not necessarily imply vulgarity but rather a strength that shows the supreme spirituality of her presence. The treatment of the power of wealth is more elaborately depicted in multiple ways as compared to James's early phase fictions such as *Daisy Miller* and *The Portrait of a Lady*. James also seems to sympathize with Merton Densher, an English journalist in *The Wings of the Dove*, because of his indifference to moneymaking and an appetite for success despite his lack of masculinity and passivity. Through the characterization of Densher, one can see that James in his later works seeks fresh possibilities and solutions for the conflict between two different concepts that James finds in a class-oriented English society and financially developed America in the early twentieth century.

1 序

『鳩の翼』(*The Wings of the Dove* 1902)は、同時期に相次いで執筆された『使者たち』(*The Ambassadors* 1901)や『金色の盃』(*The Golden Bowl* 1904)と並び、ヘンリー・ジェームズ(Henry James)の円熟期を形成する作品の一つである。『鳩の翼』では、富を所有するヒロインと、彼女の富をめぐる人間関係に光が当てられているが、このような構図はジェームズの創作活動前期の作品である『アメリカ人』(*The American* 1877)や『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady* 1881)にも見られる。しかし、『鳩の翼』のヒロイン、ミリー・シール(Milly Theale)と富の関係には、『アメリカ人』のニューマン(Christopher Newman)や、『ある婦人の肖像』のイザベル(Isabel Archer)らのそれとは異なる面もある。

『鳩の翼』における富と登場人物の関係は、作品が出版された当時から考察の対象となってきた。例えばジェームズと同年代の作家であるハウエルズ(W. D. Howells)は、ジェームズ前期の代表作の一つである『デイジー・ミラー』(*Daisy Miller* 1878)のヒロインが、富の力に対して盲目的であった

のに対し、『鳩の翼』のヒロインは富の持つ力を充分認識した上で行動する人物として描かれていると指摘する。より最近の批評でも同様に、「ジェームズの円熟期の主人公たちは、前期作品の人物たちよりも金銭の持つ効果についてよりよく理解している」(McCormack 4-5)といったものや、「ジェームズの円熟期の作品では、アメリカの富が人間の可能性の換喩〈メトニミー〉となる」(Kventsel 65)といった指摘がなされているように、前期作品における富の描かれ方と後期のそれとが異なっていることが指摘されている。

本論ではそのような先行研究をふまえて、『鳩の翼』における富の描かれ方をさらに考察するため、ミリーと彼女を取り巻く人々との関係や、その中で生じる心理的葛藤を分析したい。そしてミリーの魅力や、彼女と他の人物たちとの関係の中に、前期作品にはあまり見られなかったジェームズの金銭観の傾向があること、アメリカとヨーロッパの対立に焦点を置いていた前期作品とは異なり、両者に深い理解を持った新しい人間観や世界観が表されていることを明らかにしたい。

(2010年12月8日受理)

* 宇部工業高等専門学校 一般科

2 ミリーの魅力を支える富

『鳩の翼』において、ミリーと関わる人物たちは、彼女と彼女の富を切り離して考えることができない。例えば、恋愛小説家を志望し、ミリーの世話役を務めるストリングム夫人 (Suzan Shepherd Stringham) は、ミリーをニューヨークという大きな舞台を背景に、身内の者に全て死なれ、その病身のほっそりとした肩の上に、巨額の遺産が山積みされた「ロマンチックで孤独で伝説的な身の上」(77)¹を持つ女性だととらえる。夫人は、ミリーを悲劇のヒロインとして扱い、二人が旅行で出かけたスイスの山中で、断崖の見晴台から地上を見下ろすミリーを見て、「地上の世界に君臨しようとしている王女」(88)にたとえる。そこには、ミリーの悲劇性やロマンス性を強調する、ストリングム夫人独特の見方がある。夫人の目を通して見たミリーは、富がもたらす豊かさと深く結びついており、ミリーの悲劇性には彼女の富が欠かせない要素となっていることがわかる。

ケイト (Kate Croy) もまた、ミリーの魅力を彼女の富と結びつける人物である。ケイトは一家の貧しさが足かせとなり、恋人との仲を引き裂かれようとしている美貌のイギリス人女性である。ケイトから見たミリーは、「金のあふれるニューヨーク」からやってきた「桁外れの自由の機会」(114)に恵まれた娘であり、「銀行口座にたっぷりお金をもっている天使」(216)である。有利な結婚をすることで一家を貧窮から救い出す役割を期待されているケイトにとって、富を所有しているがゆえに自由を謳歌できるミリーは、病身とはいえ、激しい羨望の対象となる。またそれだけでなくミリーの富の力がもたらす自由な立場は、ケイトに足りないものを際立たせ、彼女の悲惨な状況を浮き彫りにしさえする。

ミリーの人物造形は、彼女の物質的豊かさや自由だけでなく、アメリカ娘特有の無邪気さが加わることで、一層魅力あるものとなっている。例えば、恋人デンシャー (Merton Densher) との関係性を公にすることのできないケイトが、彼と二人きりで行動しているところをミリーに目撃される場面である。ミリーは、ケイトが感じているであろう気まずさを素早く察知しながらも、それに気づかぬ初心な女性の役割を演じつつ、二人を窮地から救うという賢さを発揮する。このようなミリーの振る舞いは、批評家 Ammentorp によって、「行動と富とをうまく利用することを知っている」(545)と評されているように、人を利用し、また利用されることで成り立つ社交界において、狡猾さではなく無邪気さを装うことで自身の身を守るものとなっている。これは、ロンドンの社交界における豊かな経験をふまえて、自らが不利な立場になるのを避けようとするケイトの巧妙な社交技術とは対照的である。無邪気なアメリカ娘といった典型は、ジェイムズが前期作品より好んで用いる女性像の一つである。しかし『デージー・ミラー』のデージーは、裕福で無邪気なアメリカ娘という意味ではミリーと似ているが、デージーの無邪気さは、

演技というよりも彼女の無知によるところが大きい。そのためデージーは自分の身を守ることが出来ず、保守的な社交界から排除されることになる。これと比較してミリーの場合、デージーのように向こう見ずな無邪気さではなく、自分に期待される役割を見抜き、それを状況に応じて適切に演じることのできる器用さを備えているのである。

また、他のジェイムズの前期作品である『ロデリック・ハドソン』 (*Roderick Hudson* 1876) では、結末における主人公ロデリックの死はそのまま彼の消滅を意味している。それに対してミリーの死は、「単なる消滅ではなく誇り高い抵抗」を示している (Cutting 83) と評されることからわかるように、前期作品の主人公には認められなかった力強さがある。批評家 Hutchison は、肉体を超えた魂の存在を信じようとしていたジェイムズの姿勢が『鳩の翼』において認められるとし、ミリーの死が単なる犠牲者の死ではなく、彼女自身が選択した、理想の生き方または死に方であったことを、次のように述べる。

By consciously submitting to Kate and Densher's plan, Milly escapes the role of victim and asserts herself. She externalizes her desire through her legacy, and by assuming an active role she moves beyond the status of mere object. She becomes idealized, but it is an idealization of her own design. (127)

こうしたミリーの積極的な生き方は、「犠牲者の立場を免れ、自分の存在感を確立」したものであり、彼女の肉体が消滅した後にも、富がもたらした彼女の内面の豊かさが人々の印象に残るのである。

さらに、ミリーの富に対するこのような姿勢は、ジェイムズの前期作品の一つである『アメリカ人』のニューマンのそれとも異なっているようだ。ニューマンは、富の力で、文化や教養を買収できるという自信を抱いて行動する。彼は、人生における競争を勝ち抜き、その結果、莫大な財産という「賞金」を手に入れるものの、財産の使い道に頭を悩ませる。ニューマンは、教養を身につけるべく訪れたルーブル美術館で、本物の絵画に接するのではなく、その前にいる模写家たちと、模写の値段交渉に精を出すように、富の力に依存した、ビジネス手法を実践することのほうに熱中する。彼のそのような行動は、アメリカのビジネス社会では成功しても、同様の価値基準のないヨーロッパ社会においては通用しない。

『鳩の翼』でナショナル・ギャラリーを訪れるミリーは、ニューマンと同様、名画の前の模写家たちに興味を抱く。しかしそれは、彼女たちに「話しかけたい、彼女たちの生活に入り込んでみたい」(176)というように、模写家たち一人一人の人生に対する興味から来るものである。ミリーの目的は、富の力により教養を身につけたり、人々からの賞賛を得たりすることではなく、ロンドンの社交界という未知の世界にお

いて「人間に触れたいと訴え、生活を愛していると主張したのは正しかった」(99)と彼女が再認識するように、世の中と深く関わりを持ち、人間を知り、人生を経験したいという、生への欲求が基になったものなのである。

ミリーが療養のために滞在するヴェニスで終の棲家として選ぶのは、人目を惹くような華やかな場所ではなく、ヴェニスの豊かな歴史をひっそりと、そして情緒豊かに漂わせているレポレリ宮殿である。この行為には、歴史的建造物を買収する彼女の富の力が示されている。しかし宮殿の女主となったミリーの立ち居振る舞いは「礼拝中の女祭司」(262)や「天国の宮殿に君臨する天使」(302)と表現されるように、買収行為に伴われがちな俗悪さではなく、彼女の持つ神聖な魅力を伝えている。

これまでの黒ずくめの地味な喪服を脱ぎ捨て、白いドレスに厚重な真珠を身につけて豪華な晩餐会に登場する場面におけるミリーは、ケイトによって「鳩」にたとえられる。ケイトは、貧しい自分には太刀打ちできない華麗さと神秘性をまとったミリーを見て、「人はなぜか、宝石を身に飾った鳩というものを想像できないけれど、でもあの真珠の首飾りは一分の隙もなくミリーに似合っている」(307)と言う。ミリーの富は、より高い場所への飛翔や、休息のイメージを持つ鳩に関連付けられることで、多層的な意味合いを帯びてくる。ミリーの富がもたらした彼女の存在感は、ミリーの死後もケイトやデンチャーの中に残り続ける。このように、ミリーの富は、単に世俗的な快楽と結びつくのではなく、さらに鳩の象徴によっても神聖化され、彼女の魅力を作り出す重要な要素として機能しているのである。

3 金銭を軸とした人間関係における限界と 広がり

金銭に関する前期作品との違いは、ミリーの描かれ方のみだけでなく、損得勘定に基づいた人間同士の結びつきを通して顕著となっている。例えば、『ある婦人の肖像』における主人公イザベルと、彼女の富を利用するマール夫人(Madame Serena Merle)やオズモンド(Gilbert Osmond)との関係である。ここで見られる関係は、『鳩の翼』において、ミリーの富を利用しようとするケイトとデンチャーのそれと類似した面を持つ。しかし、両作品における人間関係を比較する批評家 Sandeen は、両者の間に類似を認めながらも、マール夫人とオズモンドに比べ、ケイトとデンチャーには、悪者と言い切れない部分があると述べている。また『鳩の翼』の冒頭で、ジェイムズが作品ケイトの実家であるクロイ家の惨状を描くのにかかなりのページを割いている点には悲劇的効果がある、と主張する批評家 Bradbury は、ケイトの立場に、読者の同情をかきたてる余地があるとみなす。また、批

評家 Landau が、ミリーとケイトの間に「主導権争い、綱引き」(78)が行われていると指摘するように、ミリーがケイトの犠牲者であるという見方は極めて一方的なものに過ぎないということも示されている。

ミリーの富や自立性を羨望するケイトは、没落した一族を貧困から救うため、金と地位を得られるような結婚をしなくてはならない。そのためケイトは、貧しい恋人デンチャーへの愛情を断念し、自分自身が店の窓に飾られた「商品」であるかのように振舞う必要がある。ケイトの伯母であり、彼女の保護者でもあるラウダー(Maud Lowder)は、ケイトとの交際を認めてもらおうとするデンチャーに向かって次のようにケイトの存在価値を説明する。

“Kate’s presence, by good fortune, I marked early… I’ve watched it long; I’ve been saving it up and letting it, as you say of investments, appreciate; and you may judge whether, now it has begun to pay so, I’m likely to consent to treat for it with any but a high bidder.” (65)

ラウダーにとってケイトは、値が上がるのが待ち望まれる株である。ラウダーは、姪であるケイトを落ちぶれた父親の元から引き取り、有利な結婚をさせることで、自らの社交界における立場を確立しようともくろんでいる。ラウダーは、より高い値を付けてくれる求婚者にケイトを売り渡したいのであり、貧しいデンチャーには手の届かない存在であることを思い知らせる。ここには、貧しさゆえに愛情を犠牲にし、物として取引されようとしているケイトの哀れな姿がある。ジェイムズは、そのような状況を描き出すことで、ミリーを騙そうとするケイトの行為に安易な批判を下すことなく、より寛大な姿勢で見つめているようにも見える。

もちろん、『鳩の翼』で描かれている社交界のもつ道徳的に退廃した雰囲気は、批評家 Freedman も指摘するように、1890年代から20世紀初頭にかけて、イギリスの社交界と付き合いのあったジェイムズ自身が感じ取ったデカダンスが反映されている可能性も否定できないだろう。ラウダーが、ケイトの結婚相手としてマーク卿(Lord Mark)を候補にする行為には、地位や金のある人物を利用して生きるラウダーの抜け目のなさが反映されている。マーク卿は、ラウダーのそのような欲望と要求に賛同しケイトに近づくが、ミリーの余命が短いことを知るやいなや、ミリーの財産に目を付け、彼女に求婚し始めるような節操のない人物である。彼もまた、ラウダーと同様、地位や金のある人物を利用して生きる、寄生虫のような人物なのである。ケイトはラウダーの金銭欲や社交界での出世欲のために利用される存在であり、そこには、ジェイムズが閉鎖的な階級社会に見出したであろう道徳的退廃に対する強い非難が見て取れる。またそれだけに一層、ケ

イトを利用する者たちの欲望に抵抗できない犠牲者としてのケイトの姿が浮かび上がってくるのである。

ジェイムズが作品冒頭で描くクロイ家の惨状は、かつて彼が『アメリカ人』で描いたような、退廃したフランス貴族社会の様子とは異なり、単に外側から眺めたような描写ではなく、それぞれの人物の心理面にまで踏み込んだ詳細なものとなっている。ジェイムズは、ケイトに要求される不毛な結婚のあり方を批判的に見ると同時に、そのような状況に置かれたケイトの内面の窮状を読者に推察させることで、長い伝統を受け継ぎながらも、それを活かす財力のない疲弊した階級社会に対して、同情的な見方もしているのである。

4 デンシャーの柔軟性とジェイムズの新しい世界観

損得勘定をもとにした結婚問題に振り回されるケイトは、ミリーの富を狙う人物としてではなく、犠牲者としての一面を持っており、腐敗した社交界の別の側面を体現している。またケイトの恋人であるイギリス人新聞記者のマートン・デンシャーの描かれ方には、ジェイムズのロンドン社交界に対する視点が、前期作品のそれよりずっと広がっていることが窺える。

批評家 Ammentorp は、デンシャーが「周縁的に男性であるにすぎない」(537)と述べ、彼が経済観念に基づく結婚市場において生き残りをかけるケイトの存在によって女性化されていると主張する。また Ammentorp の指摘にもあるように、デンシャーは、『鳩の翼』に登場する他の男性たちであるルーク医師(Sir Luke)やマーク卿たちのように、称号を持っているわけではない。デンシャーは駆け出しの新聞記者であり、まだ社会的地位が確立されていない人物として描かれている。デンシャーの社会的基盤は一家を支える主となるには脆弱である。そのため彼は、豊かな結婚生活を実現させるべく、病身のミリーの財産を狙い、冷酷に自らの計画を実行するケイトに翻弄されているともいえよう。しかしジェイムズは、デンシャーの曖昧な立場を、むしろ彼の若さゆえだとし、未来に希望を感じさせる可能性を秘めたものであるかのように描いている。

He suggested above all, however, the wondrous state of youth in which the elements, the metals more or less precious, are so in fusion and fermentation that the question of the final stamp, the pressure that fixes the value, must wait for comparative coolness. (47)

ケイトが目的達成のために感情をコントロールできる冷

静さを持っているのに比べて、デンシャーは彼女への情熱を抑えることが出来ない。ケイトの意のままに操られるという点でも、デンシャーは受動的である。しかしジェイムズは、そうした彼の弱さや曖昧さは、彼が形成途中の段階にあるためだとすることで、彼の行為に肯定的側面を見出そうとする。デンシャーは教区牧師の父親と模写家の母親に連れられて、幼い頃からイギリス国外で生活してきた経歴を持つ。彼は国外生活のあと、父親と同じケンブリッジで学業を修めることによって「英国人になろうとした」(72)が、「母国の島国では役に立たなくなってしまった」(72)と冷静に自己分析している。このような生い立ちのデンシャーには、閉鎖的なイギリスの階級社会にはない、自由な立場からものを考える姿勢があり、それもまた彼の可能性と魅力を作り出しているのである。

デンシャーは、ミリーを、「ニューヨークで親切にしてくれた、感じの良いアメリカの娘」(282)と述べるなど、ミリーを富の権化としてもはやすのではなく、彼女の内面と等身大の魅力に基づいて彼女を理解しようとする。これはもちろん、デンシャーの情熱がすでに、ケイトに強く注がれているからであろう。しかしそれだけでなく、デンシャーが客観的な観察眼をもつ青年記者であり、社交界のゴシップや社会的名声を得ることに興味を抱かず、新聞記者としての現状に満足していることとも関係していると思われる。デンシャーのこのような姿勢は、努力をしても上の階級にのぼることが不可能だと悟り、その場に安住する傾向を持つ当時のイギリス社会の労働者階級の人々の精神構造と似た面を持っているとも言える。しかしそこには安易な妥協に満足する負のイメージよりも、貧しくはあっても記者であることに誇りを抱いているデンシャーの使命感や労働への意欲のほうがより強く感じられる。

デンシャーは、ケイトの策略に加担し、余命少ないミリーに偽りの愛情を示すという意味では批判されても仕方がない。しかし、状況に応じた柔軟性を発揮できる強みをもつデンシャーの曖昧さと、社交界という既存の価値体系に染まらない彼の客観的な観察力には、アメリカの持つ富や自由の機会と、イギリスの保守的な伝統社会といった対立する構図を超えようとするジェイムズの新境地と、デンシャーのような従来の型にはまらない人物に対する好意が窺われるのである。

5 富に対する認識の変化をもたらした

時代背景

1876年、ジェイムズはロンドンのボルトンストリートに移り住み、そこを作家活動の拠点とするようになった。ジェイムズはロンドンの魅力を“the biggest aggregation of

human life — the most complete compendium of the world” (Matthiessen 297) と表現し、ロンドンを人間観察に最適の場だととらえたのである。しかしロンドンでの生活が長くなるにつれて、ジェイムズのロンドンに対する見方は、“dreary, heavy, stupid, dull, inhuman, vulgar at heart and tiresome in form” (Matthiessen 297) といった、魅力よりも悪い面が目立つものとなっていく。またジェイムズは、イギリスの上流社会に身をおき、そこで人間観察を続ける中で、“much of English life is grossly materialistic and wants blood-letting” (Matthiessen 297) と述べるなど、階級社会特有の道徳的に腐敗した様子を目の当たりにし、嫌悪観を抱くようになる。ジェイムズのこのような批判的な見方は、当時のロンドンの世情不安を反映した『カサマシマ公爵夫人』(The Princess Casamassima 1886) の描写にも反映されており、そこには彼がイギリスで経験した葛藤の一端がうかがえる。しかしその後ジェイムズは、イギリスとアメリカが元々「単に同じ題材から出た異なる章」であり、両者の違いに固執するのは、「無駄でつまらない形式にこだわるような」(Matthiessen 302) ものであるという考えに至る。20世紀を迎え、元来のジェイムズの興味の対象であった国際テーマが再び取り上げられる『鳩の翼』では、アメリカ作家という立場であるからこそ見えてくる、イギリス階級社会が抱える負の側面に再考の余地を見出しているようである。

産業や工業の発展に伴い、貧富の差が顕著となった19世紀後半のアメリカ社会に生じた新たな金銭観も、『鳩の翼』における富の扱い方に大きな影響をもたらすものとして看過できない。当時のアメリカでは、急速な社会発展により、資本の独占や失業者の増加といった問題が深刻となっていくが、進歩や進化といった概念そのものは、富裕層にとっても貧困層にとっても歓迎されるものであった。この時期に大きな富をなした実業家の一人、カーネギー(Andrew Carnegie)は、彼のエッセイ「富の福音」(“The Gospel of Wealth” 1889)において、ダーウィンの進化論に影響を受けたことを示しながら、社会における競争が適者保存のために必要なものであり、文明の成立要因となっているとして、肯定的にとらえている。カーネギーは、巨万の富をなしながらも私腹を肥やすのではなく、晩年は慈善事業に取り組むなど、福祉面にも大金を惜しみなく投じている。カーネギーは、富を社会に還元させるといった有効利用こそが、社会全体の進歩につながると考え、それを実行したのである。

『鳩の翼』と同様、富の問題が扱われている『ある婦人の肖像』では、主人公イザベルは従兄弟ラルフから遺産を贈られることで、自由な活動の機会を手に入れる。しかし、この思いもよらない遺産により、イザベルはラルフが生前期待したような幸福感を得るのではなく、富をどう扱うべきかという問題に直面する。遺産によりイザベルが得たものは、自由だけではなくそれに伴う責任の重さである。しかし『鳩の翼』において、ニューヨークの古い家柄の最後の生き残りである

ミリーの富は、彼女が代々受け継いだものであり、すでに彼女の人格の一部として描かれている。そしてミリーの遺産の贈与は愛する者へと彼女の望むとおり極めて有効な形で行われ、富の力が贈与を行った彼女を一層崇高な存在にしている。このように、『鳩の翼』では、一貫してミリーの富が、彼女の長所や立場が損なわれないような形で描かれている。そうした富の描かれ方の背景には、先に述べたような富の所有とその還元を肯定する時代の影響があったことも否定できないのではないだろうか。

ジェイムズの私的生活における変化も、『鳩の翼』の背景に影響を与える要因の一つだと思われる。1880年代から90年代にかけて、ジェイムズは相次ぐ身内の不幸に襲われただけでなく、劇作や社会派小説などの実験的活動の失敗が続き、かなり大きな精神的打撃を受けた。しかしジェイムズはそれらの災いを新たな創作意欲への原動力とし、世紀の変わり目には『鳩の翼』、『使者たち』、『金色の盃』、といった彼の円熟期を形成する重大作品を相次いで仕上げている。そして、ロンドン生活を通して学んだイギリスとアメリカに対する新たな認識や、経済大国となったアメリカの富への肯定的な受け止め方と相まって、アメリカの富裕階級を代表するミリーには、それまでのジェイムズ作品にはあまり見られなかった新しい強みを伴う描き方がなされているのではないだろうか。

6 結び

ジェイムズが晩年において自らの少年の頃の思い出を綴った *Notes of a Son and Brother* (1913) では、ミリーのモデルになったとされる、ジェイムズの従妹、ミニー・テンプル(Minnie Temple)について数多くの言及がなされている。そこには、ミニーがジェイムズにとって青春の象徴であったこと、彼女の死が彼に大きな損失感を与えたことが記されている。ミニーの面影は、『デイジー・ミラー』のデイジーや『ある婦人の肖像』のイザベル、そして『鳩の翼』のミリーらの中に受け継がれていくが、特に彼女たちと富との関係は、時代を追って変化しているのである。

また、『鳩の翼』で描かれるイギリスの階級社会および社交界は、必ずしも批判的な側面ばかりが強調されているわけではない。ケイトへの同情や、デンチャーのもつ柔軟性を見てもわかるように、ジェイムズがこの時期に、ヨーロッパとアメリカとの関係を新たにとらえ直そうとしていることが窺える。そしてそれは、ミリーの富が、彼女の精神的魅力をさらに強めるように描かれているように、ジェイムズの富に対する考え方の変化だけではなく、彼のアメリカに対する態度にも変化が生じていたことを示唆している。

1903年、『鳩の翼』を書き終えた後のジェイムズは、20年ぶりにアメリカの地を踏みたいという強い欲求に駆られ、祖

国再訪を果たす。アメリカを長年不在にしていたジェイムズにはアメリカ再発見への興味が沸き起こり、かつて若かりし頃ヨーロッパに憧れを抱いたように、今度はアメリカがその対象となっていたに違いないのである。

本稿は、日本アメリカ文学会 中・四国支部 第 38 回大会（島根大学 2009 年 6 月 13 日）において発表した原稿に加筆修正したものである。

¹ ここで使用したのは Norton 版の *The Wings of the Dove* 2003 であり、以下、ここから引用した本文ページ数は括弧に入れて示す。

参考文献

- Bradbury, Nicola. *Henry James: The Later Novels*. Oxford: Oxford UP, 1979.
- Cutting, Andrew. *Death in Henry James*. New York: Palgrave Macmillan, 2005.
- Edel, Leon. *Henry James: The Treacherous Years: 1895-1901*. New York: Lippincott, 1969.
- Freedman, Jonathan. *Professions of Taste: Henry James, British Aestheticism, and Commodity Culture*. California: Stanford UP, 1990.
- Howells, William Dean. "Mr. Henry James' s Later Work." *The Question of Henry James: A Collection of Critical Essays*. Ed. F. W. Dupee. New York: Octagon Books, 1973.
- Hutchinson, Hazel. *Seeing and Believing: Henry James and the Spiritual World*. New York: Palgrave Macmillan, 2006.
- James, Henry. *The Wings of the Dove*. Ed. J. Donald Crowley. New York: Norton, 2003.
- Kventsel, Anna. *Decadence in the Late Novels of Henry James*. New York: Palgrave Macmillan, 2007.
- Landau, John. "A Thing Divided": *Representation in the Late Novels of Henry James*. Madison: Fairleigh Dickinson UP, 1996.
- Matthiessen, F. O. *The James Family: Including Selections from the Writings of Henry James, Senior, William, Henry, & Alice James*. New York: Overlook, 2008.
- McCormack, Peggy. *The Rule of Money: Gender, Class, and Exchange Economics in the Fiction of Henry James*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1990.
- Row, John Carlos. "Henry James and Globalization." *Henry James Studies*. Ed. Peter Rawlings. Houndmills: Palgrave Macmillan, 2007.